宮本常一による昭和 10 年代民俗調査の足跡

Following the Footprints of Folklore Investigation by Tsuneichi Miyamoto in the 1935's

佐藤 智敬

SATO Tomotaka

要　　旨

その知名度から日本を代表する民俗学者のひとりに数えられる宮本常一は、昭和 10 年代、30 代前半でアチック・ミューゼアムに入所し、渋沢敬三の調査協力をするとともに、日本各地の民俗調査に歩いている。

本稿では、アチック入所前の宮本の略歴を確認の後、アチック入所後の調査活動について整理した。その内容は多岐にわたっており、水産史研究という枠でくくることは困難なものも多い。昭和 20 年の空襲ですべてが焼失したとされる当時の調査資料についても、宮本常一資料を収蔵する周防大島文化交流センター（宮本常一記念館　山口県周防大島町）にて調査したところ、いくつか失われずに保存されていることが確認された。残された資料のいくつかは、渋沢に協力した魚名調査、漁業史調査に影響を受け作成されたものであった。

さらに資料の細目を確認すると、宮本の調査活動の多くには、聞き取り以外に古文書の筆写が伴っている。戦後昭和 20 年代、日本常民文化研究所（アチック・ミューゼアムから改称）が主導した全国各地の漁業制度資料を採集、借用、筆写する事業に宮本もかかわっており、これらの作業を実施している。集積された資料のなかには、宮本が昭和 10 年代に自身のフィールドノートに筆写した古文書や、借用をせずに調査地で筆写したものが含まれている。そしてそれは、その後の著作で引用される確固たる資料となっているものさえある。

昭和 10 年代の宮本常一による民俗調査は、聞き書きの達人という一般的な宮本評価とは少々異なっている。古文書を解読、資料化し、聞き書きとともに活用していくという、宮本流の調査手法を確立していく途上にあるといえるだろう。

【キーワード】昭和 10 年代、宮本常一、民俗調査、アチック・ミューゼアム、調査資料

1．はじめに

宮本常一（明治 40（1907）.8.1～昭和 56（1981）.1.30）は、今や日本を代表する民俗学者のひとりとして知られた存在である。山口県の周防大島に生まれた彼は平成 19 年（2007）に生誕 100 年を迎え、周防大島、東京都府中市、長崎県対馬市、新潟県佐渡市などのゆかりの地において記念行事が

行われたことも記憶に新しい。昭和36年（1961）に東京都府中市に居を構え、武蔵野美術大学の教員となり、多くの人材を育成したことでも知られている。

そんな宮本の経歴をひも解く手がかりは多く、自伝『民俗学の旅』(1)、評伝『旅する巨人』(2)、ウェブサイト上の宮本常一年譜(3) 等によって、その経歴をかなり詳細にたどることができる。宮本自身が非常に筆まめな人物であり、日記をはじめとした日々の記録を多く残し、しかもそれが参照可能な形で伝えられているからに他ならない(4)。その意味で、昭和10年代の宮本常一の足跡を記録上で追うことは、それほど難しいことではない。しかし、詳細な記録が残りすぎているがゆえに、その多岐にわたる足跡をつぶさに検証することもでき辛くなっているのも事実であろう。

宮本常一がすごした昭和10年代は、彼の年齢的には20〜30代に相当する。その後多くの人材を育成し、民俗学のみならず離島振興や地域おこしに力をそそいだ彼の調査、研究スタイルを醸成していく時期であったといってよいだろう。本稿では、ひとことで「多岐にわたる」と記すこともできる宮本の調査記録の一部を追跡することで、宮本が渋沢敬三やアチック・ミューゼアムを通してどのような視点を持つに至り、それがその後の宮本にどのような影響をおよぼしていったのかを考えてみたい。

２．昭和10年代の宮本常一

まずは、昭和10年代にいたる宮本の略歴を簡潔に記しておこう。

山口県の周防大島に生まれた宮本は、大正12年（1923）、15歳のときに大阪に出、逓信講習所に入る。その後15年まで郵便局勤務の後、昭和2年（1927）天王寺師範学校を卒業、大阪府泉南郡有真香村（現岸和田市）の修斉尋常小学校に赴任の後、大阪各地の尋常高等小学校に赴任する。

昭和5年（1930）に肺結核にかかり、郷里周防大島で長期療養中に雑誌『旅と伝説』に周防大島の昔話等を投稿、柳田國男と知り合うことになる。復帰後、大阪を拠点に民俗学に関する活動を続けていく中で、渋沢敬三やアチック・ミューゼアムとかかわるようになっていく。

渋沢敬三と宮本の初対面は、は昭和10年（1935）の大阪でのことだった。このとき宮本は27歳。小学校の教員として勤務するかたわら、大阪民俗談話会においておもに近畿地方の民俗調査等にかかわっていた。

渋沢との対面以降、アチックとのつながりは徐々に強くなっていく。瀬戸内海の離島・周防大島出身であった宮本であったからであろう。当時は正式な所員ではなかったにもかかわらず、昭和12年（1937）にアチック・ミューゼアムが実施した瀬戸内海調査に同行し、渋沢らとともに島々を巡っている。 そしてさらに2年後の昭和14年（1939年10月）、宮本は32歳にしてアチック・ミューゼアムに入所し、東京の渋沢邸を活動拠点とした。

経歴の多い宮本の略年譜においては、アチック入所後、日本全国を歩き民俗調査を行い、戦争が激化したころ大阪に戻り奈良県立郡山中学校嘱託となったのち、昭和20年大阪府の嘱託となり、生鮮野菜需給対策を立てるため、府下農村を歩く、そして同年空襲によって大阪府堺市の家が全焼。家財、写真、書きためた原稿一切を失うのである。

３．アチック入所後の民俗調査および執筆活動

こうした略歴が知られているため、宮本が残した民俗学の成果は、戦後のものが中心であると考えることもできるのかもしれない。しかしながら、年譜にあるように昭和10年代以前の宮本が書

写真1　周防大島文化交流センター

きためた資料類一切が失われたというわけではない。故郷周防大島に残された調査記録や、アチック・ミューゼアムから刊行された報告の原稿類、さらには後年になってまとめなおした『宮本常一著作集』に収録された調査報告の内容等、その活動を遡及するための材料は意外と多い。そして、平成16年（2004）に宮本常一の資料を収蔵した周防大島文化交流センターが、故郷周防大島に開館している（写真1）。平成27年（2015）に「宮本常一記念館」の愛称がつけられた同センターには、宮本が撮影した約10万枚にのぼる写真データや、2万冊の蔵書類等とともに、直筆原稿や調査資料等が収蔵、整理されている。それらをもふまえ、さらに詳細に宮本の昭和10年代をたどってみよう。

前述のとおり昭和10年（1935）3月、大阪民俗談話会の会場で、宮本は渋沢敬三と初対面する。そして同年7月、東京で柳田國男還暦記念の講習会に出席するのにあわせて、アチック・ミューゼアムに宿泊することとなった。その際、渋沢より「アチックは水産史の研究をしている者が多いが、具体的に漁村というのはどういうものか、どのような構造を持ち、どんな生活をしているのかということについて具体的にわかっているものが少ない。君は海岸育ちだから漁村の具体的な生活誌を書いてみてくれないか」と言われたという[5]。それをきっかけとして、翌11年（1936）アチックから刊行されたのが『周防大島を中心としたる海の生活誌』であった。宮本自身にとって最初のまとまった書物であったという。

同年には大阪府滝畑において左近熊太氏への調査を続け、翌12年に『河内国滝畑左近熊太翁旧事談』が刊行された。さらに民間伝承の会より奈良県吉野郡天川村の山村調査を担当している。漁村、水産史に限らない、様々な調査を行っていることがうかがえる。

昭和12年（1937）3月には、越前石徹白村調査。そして前述の通りアチック・ミューゼアム瀬戸内海調査に同行し島々を巡る。昭和13年（1938）滋賀県湖北山村を歩いている。

そして昭和14年（1939）小学校退職、妻子は大阪在住のまま上京しアチックに入所後、中国山地民俗採訪調査を実施している。

昭和15年（1940）には1月に南九州調査、4月に伊豆西岸を桜田勝徳と調査、5月に桜田勝徳と宝島（鹿児島県）調査、9月には渋沢と島根県、山口県を歩き、11月には新潟～東北地方でオシラ様調査 を実施している。

昭和16年（1941）1月には周防大島の農具調査、2月には愛媛～高知～徳島を歩くなか、『忘れられた日本人』の「土佐源氏」、「土佐十川夜話」のもととなる出会いをする。

4月には兵庫県淡路の沼島調査、7月に津軽オシラ様調査、9月に瀬戸内海島嶼部の広域において魚名調査、10月越前越後調査、11月に祖谷山等調査、鵜飼調査。

昭和17年（1942）には胃潰瘍のため郷里に戻り、百姓仕事（8月頃まで）途中柱島の地割調査、9月兵庫県淡路などで釣針、テグス調査、大阪テグス問屋調査、10月兵庫県釣針調査と続く。

昭和18年（1943）、戦争激化のため調査をやめ、宮本馨太郎、吉田三郎と共に保谷民族博物館の整理を行う。4月からは帝国学士院委嘱の日本水産科学史編さんを行っているが、12月には大阪に戻り奈良県立郡山中学校で歴史を教えた。

昭和19年（1944）には特に大きな調査活動はなく、昭和20年（1945）大阪府の嘱託となり生鮮野菜受給対策のため府下農村を歩くが、7月10日に堺空襲で自宅が全焼。家財、書籍、資料の大

半が焼失した。このとき37歳であった。

以上のような経歴から、昭和10年代の宮本は積極的に日本各地を調査し、その報告をまとめ続けていながら、戦災によって未刊行の原稿や写真類を失い、すでに刊行された調査成果以外はほとんど失われてしまったかのように見える。しかしながら、周防大島文化交流センターに集積された彼にまつわる資料群を分析していくと、昭和10年代の調査成果がわずかながら残されていることが判明した。

4．周防大島文化交流センター（宮本常一記念館）からたどる宮本の足跡

宮本の蔵書、写真とともに収蔵されている資料群より、昭和10年代の調査資料として分類整理されているものを確認すると、直筆原稿や冊子類を除くと、次のものが現存している。

①「民俗聞書」調査メモ（昭和10）　これはアチック入所以前の聞き書きメモと考えられ、周防大島に関するものである。

②「南九州調査」（屋久島　昭和15）ノート4冊、9日間の滞在中の聞き書きを同年のうちにまとめあげ、『屋久島民俗誌』（『宮本常一著作集』16所収）のもとになった記録（写真2）。

③「沼島調査」（昭和16）ノート3冊および付属資料。同年4月に兵庫県淡路島の属島である沼島（現南あわじ市）における調査記録である（写真3）。

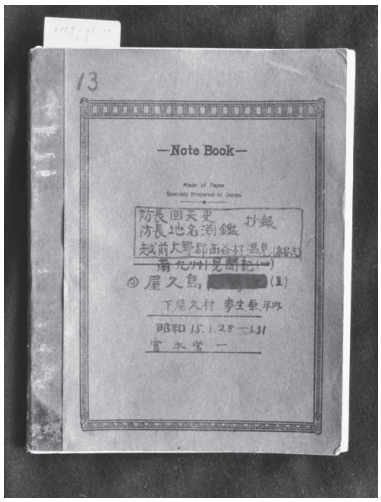

写真２　南九州見聞記（屋久島ノート）周防大島文化交流センター所蔵

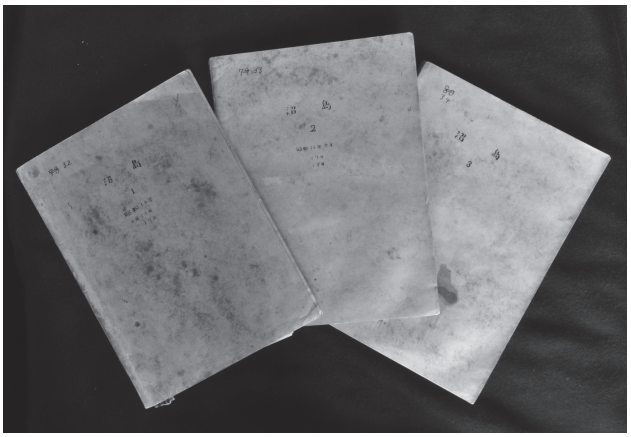

写真３　沼島ノート（周防大島文化交流センター所蔵）

④「瀬戸内海魚名聞書きメモ」昭和15年9月19日～22日と記載されているが、実際は昭和16年に行われたもので、大阪～観音寺～川之江（愛媛）～三島～小松～今治～豊島～御手洗（広島　大崎下島）～木江（大崎上島）～大三島～生口島～因島（広島）とめぐりひたすら魚名について列挙したものである。さらに、周防大島に隣接する沖家室島についての魚名調査も含まれている（写真4、5）。

⑤「釣漁関係史料抜書きカード」、「釣漁関係史料抜書き」（年代不詳）「渋沢先生」と記した封筒に封入されているため、渋沢主導の調査に使用したものと考えられる。127ミリ×80ミリカード199枚。『日本水産捕採誌』からの抜書であり、日本各地の漁業者の来歴を記したものが中心、その裏面が魚名索引となっており、一枚一枚魚名が記してある。ただしその筆跡

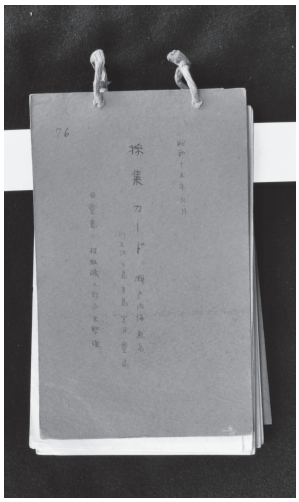

写真４　瀬戸内海魚名採集カード表紙（周防大島文化交流センター所蔵）

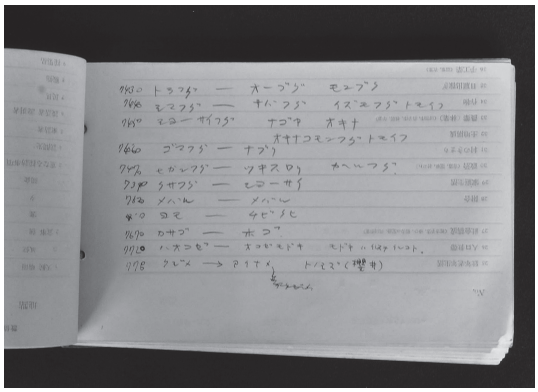

写真５　瀬戸内海魚名採集カード中面（周防大島文化交流センター所蔵）

写真６　魚名カードが入っていた封筒（周防大島文化交流センター所蔵）

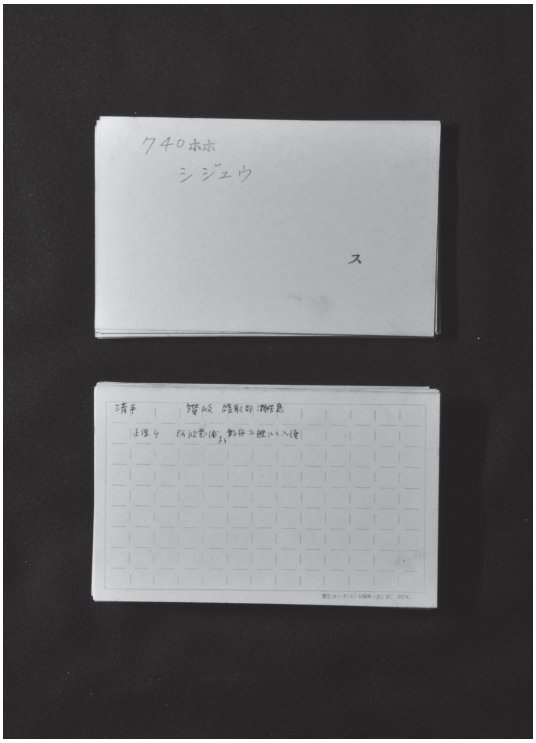

写真７　魚名カードおよび釣漁関係カード（表裏に記載　周防大島文化交流センター所蔵）

は宮本のものとは異なっている（写真６、７）。

資料を概観すると、渋沢の意向に沿った、漁業や魚名に関する調査記録が比較的多く残されているように思える。前述の通り昭和 10 年代の宮本は大阪を舞台として精力的に調査を行っている。それらの記録や、原典や話者をめぐって論争の絶えない「土佐源氏」（『忘れられた日本人』等に収録）に登場する、盲目の老人と出会ったとされる高知県檮原の調査記録類等は現存していないようである。

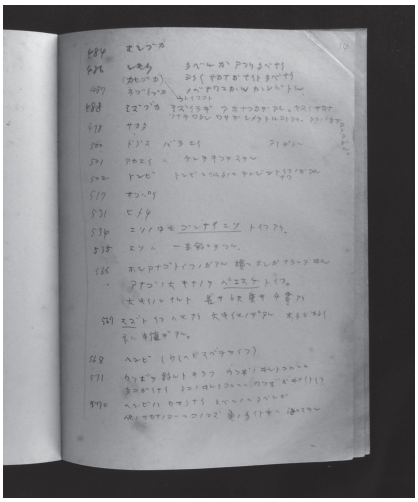

写真８　沼島ノートに記された魚名項目（周防大島文化交流センター所蔵）

興味深いことに、現存資料のうち③～⑤については、渋沢が関心を持っていた日本の魚名や漁業史に関する調査資料ととらえることができる。①、②に関しては、集落の様子や行事、伝承等の聞き書き、地域を描くためのいわゆる「民俗誌」を記すための資料として読むことができるものであった。③の沼島については主として漁業についての調査記録であり、島内に残る漁業制度に関する古文書の筆写、漁業の技術についての聞き書きとともに、沼島における魚名調査の成果が多く採録されている。④についてはその名の通り瀬戸内海の魚名をひたすら列挙している。③と④の魚名調査については宮本が持参した動物図鑑に載っている魚の図を現地で見せ、その魚名について各地で聞きとりをしていく、という手法をとったようである。そのため、調査記録には図鑑に対応する魚の番号が列挙されている箇所が多い（写真８）。

魚名に関する調査は、渋沢敬三により『日本魚名集覧』（1934 年刊行）などの成果としてまとめられる魚名に関する資料の原典でもあった。

５．調査成果の発展

宮本が昭和 10 年代に実施した調査の成果は、刊行物としても多く残る。調査報告や論文の形ではなく、「土佐源氏」のように読み物として一般に知られているものも多い。しかし、宮本の調査手法の醸成という意味で、現存する宮本の調査成果は大きな意味を持っていると考えられる。

特に昭和 16 年に調査した沼島の調査記録は重要なものであろう。旅譜を見る限り、宮本が沼島を訪れたのはこの 1 度きりのことであった。そして沼島についてまとまった調査記録が刊行されることは生前にはなかった[6]。しかし、調査ノートに筆写された、漁業制度に関する近世の古文書は、その後宮本の著作のなかで引用されることもある。また、古文書を筆写するという行為自体が宮本の調査における主軸となっていく。

戦後の昭和 24 年（1949）、水産庁の委託を受けた日本常民文化研究所（昭和 17 年にアチック・ミューゼアムから改称）が漁業制度に関する古文書を日本全国から収集し、それを筆写するという事業が実施された。宮本もこの作業に従事したことが知られ、調査先で借用・筆写した古文書の筆写稿本が残されている。筆写稿本は日本常民文化研究所と中央水産研究所にそれぞれ保存されていることになっているが、宮本の手許にもその校本が残る場合があった。いずれも水産庁・日本常民文化研究所の原稿用紙に筆写されたものである。カーボンによって複写されるものであったため、宮本は自身の調査成果については手許に残したのであろう。

周防大島文化交流センターには、宮本借用、あるいは筆写による漁業制度資料が残されている。その中には、昭和 16 年の調査成果と思われる、沼島の古文書（沼島漁業協同組合文書）の筆写稿本も含まれている。沼島調査は、漁業制度資料の収集開始の 8 年前のことである。宮本の調査ノートと漁業制度資料の古文書の内容はほぼ一致する。宮本が再度沼島を訪れた形跡はないため、自身の調査ノートから古文書を漁業制度資料の原稿用紙に転記し、資料として加えたと考えてよいだろう[7]（写真 9 、10）。

周防大島文化交流センター所蔵で水産庁の原稿用紙を用いた筆写稿本と思われるものは、70 点

写真９　沼島に残る宮本が筆写した古文書原本。宮本が筆写したのはこのなかの一部であったようだ（沼島漁業協同組合所蔵）

写真 10　沼島古文書宮本常一筆写稿本（周防大島文化交流センター蔵）

を超えて存在し、沼島のほか、大阪府、兵庫県、大分県、愛媛県、山口県、長崎県（特に対馬）と多岐にわたる。もちろん、その多くは漁業制度資料調査が開始されて以降集められたものであるが、それ以前に収集した、昭和 10 年代の調査成果についても同様の書式で援用し、その成果を活用していることが今回の追跡調査で改めて確認できた。宮本にとっての戦前のアチックの調査活動が、戦後の漁業制度資料調査の起点となっていたのであろう。

調査地で人びとの話を聞きだす名人と思われがちな宮本は、調査地において古文書を解読、筆写することにも時間と精力をそそいでいた。漁業制度資料の収集と同時期に行われた九学会連合主導による対馬調査や、国立公園指定に伴う五島列島の調査においても、残された宮本の調査ノートにはおびただしいほどの古文書の筆写があり、そしてその多くが、漁業制度資料の筆写稿本として転写されている。宮本の場合、その場で古文書を筆写するのと、一時期資料を借用する場合とがあり、おもに、その場で筆写した古文書については宮本の手許に筆写稿本としても残されたということのようである。

現地に残る古文書を分析し、生活する人々の話と総合して土地のくらしを叙述するという宮本の研究手法の端緒は、昭和 10 年代の民俗調査のなかで現れていたといってよいのだろう[8]。

６．おわりに

昭和 10 年代の宮本の足跡をたどってきたが、その後の宮本の経歴を簡単にふりかえっておこう。

昭和 24 年（1949）　農林省水産資料保存委員会調査員
昭和 25、６年（1950, 51）　対馬調査
昭和 27 年（1952）　五島列島調査
昭和 29 年（1954）　全国離島振興協議会の初代事務局長
昭和 33 年（1958）　佐渡調査
昭和 35 年（1960）『忘れられた日本人』刊行
昭和 36 年（1961）　渋沢邸より東洋大学から文学博士号を受ける・東京都府中市に転居
昭和 39 年（1964）　武蔵野美術大学に就職

昭和 41 年（1966）　日本観光文化研究所初代所長
昭和 55 年（1980）　故郷周防大島に郷土大学を開設
昭和 56 年（1981）　胃がんのため死去（73 歳）

『忘れられた日本人』が注目され、採録された「梶田富五郎翁」が筑摩書房の現代国語の教科書に取り上げられたり、「土佐源氏」が俳優坂本長利の一人芝居で注目されたり、共編著の『日本残酷物語』が話題となるなど、多くの人々に宮本の名が知られるようになるのは戦後のことである。離島振興や地域おこしに力を発揮しだすのは昭和 28 年以降、大学の教員として人材を育てていくようになるのは晩年に近い。昭和 10 年代の宮本はまだ若者である。戦後に著名な民俗学者としての地位を確立していく宮本の、民俗学者としての研究手法を形成したのが、この時期であったといえるのかもしれない。

残念ながら昭和 10 年代における調査成果の多くは戦災で焼失してしまったため、今回紹介した資料のみで全体を把握できたとは考えられない。しかし、戦後の宮本があゆんできた研究活動の礎は、記憶によるものに増して、記録に残っている実物資料を通したものであったと考えられる。その意味でも、宮本の手許に残った調査記録は宮本自身にとっても貴重なものであったろう。

もちろん、この時期の宮本は個人の成長の場だけではなく、アチック・ミューゼアムにおける研究対象に関する資料を可能な限り集める、いわば「何でも屋」としての側面もあった。アチック入所の際、宮本が渋沢よりの言葉を次のように回想している。

「君には学者になってもらいたくない。学者はたくさんいる。しかし本当の学問が育つためにはよい学問的な資料が必要だ。その資料―とくに民俗学はその資料が乏しい。君はその発掘者になってもらいたい。[9]」

この時期、宮本が実践した調査はまさにこの渋沢の意志に沿ったものであった。そのためか、ほとんどの記録のなかで、何らかの分析や政治思想的解釈を加えたものが少ない。客観的な資料としての古文書を重視し、筆写、活用することを考えたのだろう。そしてその姿勢は戦後のさまざまな事業や研究成果にも引き継がれていったのである。

ところで、宮本の紀行文やエッセイには記憶違いや事実誤認を含んだものが多分にみられ、そのまま引用、参考文献として使用できないものがある。現に学術論文で宮本の紹介する事例を引用するものは少ない。しかし、そうした際に引き合いにだされるのは、調査報告書や論文ではないものである。むしろ歴史資料を多用し、学術論文の体裁を整えた宮本の著作は、自身が古文書を引用し、出典を明記して論を組み立てていくものが少なくない。例えば宮本の博士論文、『瀬戸内海の研究　島嶼の開発とその社会形成－海人の定住を中心に』（1965　未來社）は、脚注や引用資料が豊富で、聞き書きよりもむしろ古文書を基礎としたものであり、今回紹介した沼島の事例も登場する。研究者宮本常一の集大成は「日本文化の形成」「海から見た日本」という壮大なテーマであったが、それが完結することなく、宮本はこの世を去った。彼にとって、こうした大きなテーマを結実させるための方法論を構築していく時期こそが、昭和 10 年代であった。

注

（1）宮本常一『民俗学の旅』（2000　日本図書センター）。
（2）佐野眞一『旅する巨人』（1996　文芸春秋）。
（3）宮本常一データベース http://www.towatown.jp/database/（2018 年 11 月 22 日閲覧）。

（4）自伝や評伝とともに、おもに戦後の宮本の日記と撮影した写真の一部をまとめた『宮本常一　写真・日記集成』（2005　毎日新聞社）、15 歳から 25 歳までの日記を集成した『宮本常一日記　青春編』（2012　毎日新聞社）などにより、宮本の動向は比較的丹念に遡ることができる。

（5）宮本常一『民俗学の旅』（2000　日本図書センター）pp. 90-91。

（6）平成 23 年（2011）に周防大島文化交流センターより調査ノートを翻刻した「宮本常一　農漁村採訪録」シリーズの一つとして『淡路沼島調査ノート』が刊行されている。

（7）周防大島文化交流センターの宮本常一蔵書には、『沼島物語』（1970　沼島壮年会）が収蔵されている。沼島で追跡調査を実施した際、かつて沼島調査を実施したことを、離島振興の関係で島のことを学習していた若者が聞きつけ、東京都府中市の宮本宅を訪ねたことがあったという。宮本蔵書の『沼島物語』は特に宮本によるメモ書きがあるわけでもなく新品同様であったが、宮本が 1 回の調査の後にも関心を捨てきることがなかったことが見て取れる。なお、沼島はその後、柳田國男主導のいわゆる離島調査の対象地となり、萩原龍夫によって離島採集手帳が作成された。しかし、離島採集手帳の成果をまとめた『離島生活の研究』に沼島が採録されることがなかったため、その内容はほとんど沼島にフィードバックされなかったようである。

（8）漁業制度と直接かかわらないため稿本としては残されていないが、宮本の昭和 10 年代における古文書筆写の例はほかにもある。昭和 17 年（1932）、宮本は渋沢敬三の調査協力として、テグスの調査を行っている。その成果は「兵庫県下釣針および蜍製造販売聞書」として『宮本常一著作集 22』に収録されている。同書によると、同年 10 月 13 日に調査の際、大阪市のテグス問屋・大藤庄兵衛商店（寛政 10 年に開店した問屋として紹介）を訪れ、伝わっていた古文書を借用、筆写して紹介している。幕末から明治のテグス仲間についての状態を把握した。同書では「大藤庄兵衛家文書」のタイトルで 7 点の古文書を翻刻している。渋沢史料館所蔵の渋沢敬三宛宮本常一からの書簡の中にもそれに類する話題が登場する。

　この大藤庄兵衛商店は現在「大藤つり具（アングラーズ）」と改名し、営業を続けていることが分かり、平成 27 年 12 月、宮本による調査およびテグス調査の痕跡を確認するための追跡調査を行った。調査に際し、大藤つり具社長・大藤謙一氏、会長・大藤勲氏、顧問・大藤弘氏に集まっていただき、大藤庄兵衛商店から現在に至るまでの話、テグス等の歴史を伺うことができた。

　残念ながら、空襲の被害により、かつての店舗や蔵は焼失し、宮本が借用、筆写したとされる文書資料類についてはもはや伝わっていないということであった。また、当時を知る資料等も伝わっておらず、逆にかつて『宮本常一著作集』に大藤庄兵衛商店が掲載されていることを知ったことから自社の歴史を再認識したとのことだった。その意味では、原典が失われた資料が、宮本の調査のおかげで一部残されたといえるだろう。

（9）宮本常一 2000『民俗学の旅』（日本図書センター）p. 95。